



能世一茶集

四



俳諧一葉集附合之部三



古學庵佛号
幻窓湖中 編
坎窩 久藏 校

元禄二己巳

此詩は弱くも六三三の山王の事外
吹雪けけりし雪の雪 花 鼠雪 翁
物も鴨帰るぬ形もさへ立て
七耀 山を如うの月 翁
町造り築の道しる砂とけけ
家雪とほくも川の雪の画 雪

坊主も老もいふに追まふ
土の餅つく神事おそろし
生簀子燃付くあつ市いふ
り言ふ子孫の松りきり可け
吉白丸壇あふ食をつぶす
ふらふら島をよこす眼あ
舌根子念佛を修む屋土衣
小珠ハ綿の中にははりあ
杖とあす路の破上もあ
膝行不伝や姨捨の月
夏あす垣根伐りあ 嵐あらし木
陽冷せもあ物の下ーき

霜 雪 霜 雪 霜 雪 霜 雪 霜 雪

あつ夏もあすの尺強きま
川のあつつ桶の名も取
柴垣の古木あ破まきり
後とあつらへり杖はあつら
季あつらふあつらふ秋の風
髪きりあつらふあつらふ
長門あつらふあつらふ
粥あつらふあつらふ
山あつらふあつらふ
あつらふあつらふ
あつらふあつらふ
あつらふあつらふ
あつらふあつらふ
あつらふあつらふ

雪 霜 雪 霜 雪 霜 雪 霜 雪 霜

三
二
空しくはなれりし鳥賊船
あしおろしあらしのあし
城山の神をくはく善哉と
おきて了火成吹持はふ善
けり之う連ひ子守る星月夜
照るころきはあぢきなく
山はうきひく霞の雲の録
尾木あましく苦うけの小屋
作りあつたあまきむ物さ
暖かなる百念子流うけけ
狼のあまうゆる夏の月
うらの雲子佛つらう

山 麓竹 葉 弱 山 良 翁
山 麓 良 山 葉 弱

三
二
素よりうけつ流流の浦のあえ
あしおろしあらしのあし
あまう人の流流とあまき
あまうあらしのあし
一門の花火あまきさう
あしおろしあらしのあし

山 麓 良 翁
竹 麓 山 葉 弱

三
二
あしおろしあらしのあし
あまう人の流流とあまき
あまうあらしのあし
あまうあらしのあし
あまうあらしのあし

山 麓 良 翁
竹 麓 山 葉 弱

藤のつらみよき尾のつらみよき
 藤のつらみよき尾のつらみよき
 藤のつらみよき尾のつらみよき
 藤のつらみよき尾のつらみよき
 藤のつらみよき尾のつらみよき
 藤のつらみよき尾のつらみよき
 藤のつらみよき尾のつらみよき
 藤のつらみよき尾のつらみよき
 藤のつらみよき尾のつらみよき
 藤のつらみよき尾のつらみよき

良 枇 良 枇 良 枇 良 枇 良 枇 良 枇

藤のつらみよき尾のつらみよき
 藤のつらみよき尾のつらみよき
 藤のつらみよき尾のつらみよき
 藤のつらみよき尾のつらみよき
 藤のつらみよき尾のつらみよき
 藤のつらみよき尾のつらみよき
 藤のつらみよき尾のつらみよき
 藤のつらみよき尾のつらみよき
 藤のつらみよき尾のつらみよき
 藤のつらみよき尾のつらみよき

良 枇 良 枇 良 枇 良 枇 良 枇 良 枇

女成るものやとほむる物
ある時ハ増も言の入ぬむ
梓の小枝子、走を満こ
くみへ、八妹、鳥の名も惜し
言、海、山や白、安おとけ
酒、り、八軍、さ、送、了、年、く、来、こ
秋、を、走、了、方、と、物、す、こ、し、信
文、の、秋、の、壁、つ、不、破、の、麻、の、角
鳥、の、お、休、の、位、ふ、せ、つ、月
いろく、の、新、も、ち、と、説、み、て
也、し、き、骨、を、は、ふ、く、糸、也
い、き、死、尾、を、く、手、や、む、あ、ん

翁 良 躬 翁 良 躬 翁 良 躬 翁 良 躬

芥、堀、を、う、つ、信、あ、つ、め、い、ふ
新、い、く、雲、舟、一、船、の、法、あ、つ、て
村、の、く、式、寺、の、み、を、籠、る、木、の
華、と、く、ぬ、ま、の、花、志、の、昔、の、冷、い
字、り、百、花、し、く、不、名、を、つ、の、し
多、花、子、を、さ、ふ、財、を、さ、い、入、て
何、や、の、事、し、た、な、ぬ、七、又
任、智、る、木、の、枝、れ、自、を、足、よ
す、き、希、く、む、と、な、る、の、ぬ、み
切、櫓、枝、く、く、く、に、さ、り、跡、し
左、山、鶴、の、あ、つ、そ、さ、く、く、
保、し、き、や、湯、を、く、さ、く、さ、り、あ、い

翁 良 躬 翁 良 躬 翁 良 躬 翁 良 躬

穀生石花ふと〜のあ
石をききり〜ぬりききり
酒の中〜のききり
六十のぼろ〜人の正月も
春陽す〜わが少細〜

新良 翁新良

栗門可伸の如く〜栗の本は〜
むす〜

翁

からけちや月之ぬ花を軒の栗
すれ〜 栗は〜
きり崩す山の井は〜
畔 傳ひする石の棚〜

栗齋 等翁 曾良

抱〜 吉栗〜
秋走〜 魚は鱈座〜
梓弓矢の羽は〜
新書もよ〜 曉の夢
松留余〜 吹物〜
海の迷恨を〜
聲入〜 汐のゆめ〜
され〜 おくれ〜
夏〜 花を種〜
月のひら〜
菊〜 海魚釣〜
笠の端も〜 芦の〜

等雲 次早 素業 翁 富 新良 翁 竿 葉 翁 富

菊他誰より花を折るくさ
あふまのくさす 虹の如き
そらもあふまのくさす 里隔く
了市くはく 約志くさむ
煤けく 祖父く ちんをく 傳
早くく ちみく ちんをく ちんめ
梅く ちんみきく ちんをく ちん
すく ちんをく ちんをく ちん
ちんをく ちんをく ちんをく ちん
ちんをく ちんをく ちんをく ちん
ちんをく ちんをく ちんをく ちん
ちんをく ちんをく ちんをく ちん

孤松 曾良 柳風 秋華 你 良 如 柳 木 瑞 菊

り ちんをく ちんをく ちんをく
病 ちんをく ちんをく ちんをく
あ ちんをく ちんをく ちんをく
ちんをく ちんをく ちんをく
ちんをく ちんをく ちんをく
牡丹の ちんをく ちんをく
ちんをく ちんをく ちんをく
武士く ちんをく ちんをく
ちんをく ちんをく ちんをく
羽織く ちんをく ちんをく

松 瑞 菊 良 柳 風 柳 良 你 如 柳 木 瑞 菊

秋文々 松子子 かん 菘の 美
くくひす 戸せ 暮 院の 谷 組
系 殿 子 子 歩 を 暮 る 夕 下 暮
出 塔 の 紙 子 尺 ゆ の かん 大
た った 併 帰 の 暮 と 疎 子 子 子
よ くら 絶 て 空 ぶ 紗 道 の 白 張
ほ くら くら し 石 の くら 戸 の 崩 れ くら
ま くら くら 山 も 暮 の 併 絶 し
あ くら くら くら くら くら くら くら くら
黄 くら くら くら くら くら くら くら くら

良 温 板 風 依 菊 瑞 風 菊 柳

伴 くら 成 家 高 くら くら くら くら くら
暮 の 故 暮 くら くら くら くら くら 焚
麻 子 之 尾 上 の 情 くら 回 くら くら くら
夕 月 くら くら くら くら くら くら くら くら
桶 くら 系 人 くら くら くら くら くら くら くら
好 の くら くら くら くら くら くら くら くら
あ くら くら くら くら くら くら くら くら くら
山 くら くら くら くら くら くら くら くら くら
くら くら くら くら くら くら くら くら くら くら
秋 田 酒 田 の 浪 くら くら くら くら くら くら
くら くら くら くら くら くら くら くら くら くら
素 くら くら 虫 の 雷 くら くら くら くら くら

清 風 曾 良 素 英 風 流 菊 英 菊 良 風 菊

多敷しやる内の子五款
 令利於ふはねの秋のゆ干僧
 椒蕪了三の樟の木
 つくしとせとくにまあくと
 父の旅宿を住りしす
 ことふとあとの海にわの星
 川よとせと上る石上
 ぬすひらの海にけりし
 雲よりうらりし子のり方ぬ
 けりふ橋等く猿まき子ん
 ことふとせと一かねの家
 花のふゆのさきおちの持持と
 きの甜わしとまの山也
 英 風 篇 良 篇 風 良 篇 風 良 篇 英

一葉亭集行

さみしれを暮りし涼し
 岸より舟をこはるく舟杭
 瓜とけりしとふあやの氣さるる
 里をこむしひり幸の海花
 牛のふりこころ思ひむのみ
 雨をこむしとて 橋の吟
 袋をこむしとて 山をらし
 松弦ひをく玉井境目
 永永お古ふ寺のこいさきて
 英 水 篇 良 篇 水 篇 良 篇 水 篇 良 篇

葉の長をこめて作むをかきとらる
瓜紅うつる双おのめ 石
を揚つすこれと吹よてい入て
杉ふ人子告る秋 うき
名留る舟車の有て了る言ふれ
破くともさえりてむささし
花のほちを織すす 是れりら
二 淫樂いよあま山うけの塔
稜多村を浮きおのきき富る
刀持する甲斐の一 礼
藤垣人と通るぬ屏ふし

葉良水 葉良水 葉良水 葉良水 葉良水 葉良水 葉良水 葉良水

物ふくくくくくくくくくくく
星ふあう梨ハ白髪にかきしや
集り遊女の長をともむ月
家山ゆき世も相しめりて結
柴くまきりあきか後るまきり
合歌吹本のけを屋のかけら
ふくくくくくくくくくくく
古の友をこし法をまきり
三 葉編する舟の葉合
をみそれ沙乞の市の長結とて
煤拂ゆきをまきり
元人も古の懐紙をかきくく

葉良水 葉良水 葉良水 葉良水 葉良水 葉良水 葉良水 葉良水

やま久鳥のまうふ入 お
ひつてと望とこくふ鳴のむ
山田の修をひくふむく南 良 卷 水

羽豆山舎受西園梨の不浚南管抄

菊

者うくやまをめぐす風の音 露丸
任作と人の跡ふま 外 魯良
川舟の狭き途を引ま 魯良
霧の飛つとくはゆる言方有 魯良
津多平天もくくは秋のうれ 珠妙
おもふもと 珠妙
銭くしては堂のかけをま 梨水

百里は 珠妙と木まらふ追 露丸
山登り 四平 珠妙の記をまむ 魯良
谷 持すくは 林木の森 魯良
高よみは 法志の山の家ありて 露丸
豆くくは ぬ衣ハ何と 怪 丸
古師ふも 寺なり 松皮草 露丸
多平 之 枝つさか くの歌 水 良
月久しと 引 起されて 柳 巻
歌 巧みと 持すくは 巻 丸
中門のくは 大か 花 柳 丸
的 場 の 事 吹く 子 丸
まを 珠く 七つ の 力 石 丸

三
怪泉の湧く陸奥の秋風
細原の湧くさよわのためし
山をふ化つる雪の暮智
尼名男の子まきこころ
ゆきかふくおふれ織機
花の耐るさよわまき
野々々々々々々々々々

良玉箱 丸竹 良丸 箱

酒田不玉亭袖浦に上

河川と山や吹海にけり夕涼
海松かゝる夜もさむ枕道
月やと関原もかゝる海松

不玉 曾良

氏のかやせのりかゝる秋風
さよわさよわのさよわさよわ色相
河川と山や吹海にけり夕涼
海松かゝる夜もさむ枕道
月やと関原もかゝる海松
火を焚くけり白髪もれけり
海松かゝる夜もさむ枕道
松ありおくる武隈の古松
早秋のけりさよわさよわさよわ
さよわさよわのさよわさよわさよわ
お供してゆきまふ家も忍びん
はきく味もみゆきの入
釣舟の如き舟寺の修りかゝる

良玉箱 良玉箱 良玉箱 良玉箱

くらとりのちとちの乞食
 煙くさる花あれと菜蔓打て
 二 襦の鳩は痛愛の月
 ものしハ本魂のゆくまの風
 すくさハ流りきぬハ山姥
 強かり蹴つ戸はふさる毎侍の
 杖を切さむる鳩の草花
 物あはしあふを新くあ
 えひしう衣をぬいそは
 ゆるさめん原を信し生置く
 月さく流す陣中の市
 海響ハ吉葛り真子かき入

良翁玉 良翁玉 良翁玉 良翁玉 良翁玉

小袖袴とおくの戒の海
 糸う原の母子似るまゆりび
 貧乏のちゆぬ家ハくれも
 ちあいの京持傳くふる古今集
 花う刺きむ村の酒花
 貴方の葉を立袖の羽つみ
 蚕種くさふと幕あふとる
 綿本を伝し古も是を足ん
 下ふるさくことみむ衣を

良翁玉 良翁玉 良翁玉 良翁玉 良翁玉

文月やららるるのちとちの乞食

翁

あまのこゝろの 桐の 一葉
あまのこゝろの 食の 一葉
海寺の小舟を 上る 役
新編の 舟を 上る 役
おの 本下り 舟を 上る 役
夕あけの 舟を 上る 役
豊とく おおく 舟を 上る 役
あまのこゝろの 舟を 上る 役
きぬの 舟を 上る 役
数々の 舟を 上る 役
後々の 舟を 上る 役
あまのこゝろの 舟を 上る 役

左葉
曾良
眠臥
此竹
布雲
石雪
瓶華
良葉
義年
葉
葉

無引く 舟を 上る 役
堪あす 舟を 上る 役
あまのこゝろの 舟を 上る 役
あまのこゝろの 舟を 上る 役
あまのこゝろの 舟を 上る 役
あまのこゝろの 舟を 上る 役
あまのこゝろの 舟を 上る 役
あまのこゝろの 舟を 上る 役
あまのこゝろの 舟を 上る 役
あまのこゝろの 舟を 上る 役

を
酔
葉
手
空
良
葉

早々 舟を 上る 役
いら 舟を 上る 役
深 舟を 上る 役

石雪
曾良
葉

此乃十句ありし

秋風おくる矢も松より
かの葉を隠すてに拾ふ
既に残りたる玉此古
種植す小枝すむの葉を
角のゆくり此ハ長
扉をひく雪舟を押し
一歩も鳥人多たて
無山や総て小砂を
科の起りしを
夏てし百そ
人

良翁也右雪翁良也石雪翁

松柏あはれし風は
まを耐きを
峒り老の杖を
昔の月山子
捨皮むく志の
志うたて
塔の孤村の
清なるの
かふあし
随とふ
代法も
身本も

良翁也右雪翁良也石雪翁

志願くく一ふ名や少ねん在 芝
志願を足知て新くく月
踊る言さく一き秋の鼓きくむ
す一の踊るを刃ぬ久られ
きくもや之新きくもすこ深
ゆくく一にのくく一物一物
浪あふき破りゆけくく天を拾ひ
雨子洲崎の岩をくく一く
くくくく松くくくく火ハきく
乞食起くく物くくもくく
蝶のゆきくハ笠子着くく

菊
被墻
小枝
谷ト
蒼生
志捨
夕市
教益
親生
曾良
枝

葉をもむむ法やゆくく夏の日
夕雨のすく玉乾子令くく
子をほえつても難かしく
侍のくくくくくくみめちあれ
そろ舞習ふ末の世とある
洞子さく月かき遊の光りて
波くくと葉をもくくく味ふ
節季も裡の床やかまく洗
帯一糸うけく何くくく追
禁くくくくくくを新くくく
ぬくく心清くくくくく末
去一貴捨け樹子人まく

菊
ト枝
塘観
市益
生良
枝

かゝらとくうに性ありあふ
一梅子折れぬおむすの月
秋のちかきく糸屑のひら
宿ありく之八、袖のいづく
きくうよまゝさ虫くく尺む
つぎれ子とのふれい九極まをに
身くうくひし伊西の板あ
既代よりもあえやしな
言均のきく北仕方ゆき
園ゆし五の島いきれふく
あきさくしこのはとをきけし
大うこい持るるきくはくく

市翁 蟬生 卜 親 翁 枝 良 蟬 親 翁

鹿うく尺ゆり町のきく型
風送る被ぬしと涼しやれ
若くもいふ女ともいふ
古ふ文子のあしともあしき
あけの情より舞やゆきむ
きくうかゝくきを捨りし
花よりきくしてきを友
きくのあしともあしきや
うきくくしやをふにの山

市翁 蟬生 卜 親 翁 枝 良 蟬 親 翁

かゝらとくうに性ありあふ
一梅子折れぬおむすの月
秋のちかきく糸屑のひら
宿ありく之八、袖のいづく
きくうよまゝさ虫くく尺む
つぎれ子とのふれい九極まをに
身くうくひし伊西の板あ
既代よりもあえやしな
言均のきく北仕方ゆき
園ゆし五の島いきれふく
あきさくしこのはとをきけし
大うこい持るるきくはくく

翁

みーしうさまくふ秋の夕紅
月ももゆく地のまう了次
すき可さひき村れ生垣
秋後治の門をふくし根の方
小桶の清も終ふ竹
七つよりひとあうしと娘の恩
うとふしやうあめらう系
よみあひあふちをめり地
ともし清もはちうち月
風さふく愛しとて
村のりま木干干あし編
ふし何なかうるぬ中と縁阻し

一泉
左任
ノ松
竹袁
終子
雲口
乙州
如柵
北枝
曾良
流志
泉

さしめゆゆるみれさうひめ
糸うしと箱ア系ぬよ急名
阿しと踏くお走山のや
子の戸は花ももつと知ええ
畑少しともしとていく妻

菊
枝
口
浪生
良

七月廿六日観生書し

めれてゆ〜人おわ〜や向の森
花かられ〜す〜た〜た〜く〜家
月〜し〜漁〜も〜あ〜す〜船〜め〜け〜
干ぬか〜し〜も〜を〜ち〜ら〜し〜
おん子屋宿の書のかん受ぬ

観生
曾良
北枝
生

海山の鳥をゆりく初雪
一くひをちくひうさむ技持のれ
あふくは嵐夜の戸障子
袋一ひも心も枝よ故帳袖く
うみきくふい哉文ハ世さゆの
入山此のうさむさき候
あむさきひふま精の足は
あむさきひふま精の足は
甲ハ毎此舟ノうさむさき
遠割の破をさむさ秋のこれ
月ノ起ハ気念のあ
長き船ノ基をつまらさむさ

霜 良 枝 霜 生 枝 良 生 霜 良 枝 霜

翠葉園ノ二人、かえりものこし
新くとしゆの梅一と折傷枝
汗ハ多き通す結る新 風
四九の門ノ不二のうさむさき
齋 平ノうさむさき
長生ハ徳文夫の恩 源 さま
殊々 終ハやきつともさむさ
初雪ハあふさ帰る時あふさ
酒ノうさむさむさむさ

生 霜 良 枝 霜 生 枝 良 生

ゆれむし人たれ曹のふさむさむさ

霜

今利を唱ふる陵の坊
竹ひねり割り笑の岩根へ
お家の早苗もよ百姓
郭の力田をり赤子を四千人持
付ぬ敵の法因ハ一き秋
良きくけハ流石の舟千駿
守の館も一着かして花
十重二十重もけりけりて舟の底
秋葉一葉もころけり里人
旭の青くても雲もくもる女も長
院先の新葉くもり作垣

子 堀 子 堀 子 堀 子 堀 子 堀

山中の温泉

うらうらと蒸ゆる湯の
花散るくくく山のまきくめ
月うらと角カニ袴踏めふて
鶴くくくくをやうくあふ
青淵と霧の花くくくあふ
葉かくくくくくくくくく
ゆきをゆきくくくくくくく
遊女四五人御令くくくく
昔きくくくくくくくくく
暖ハ別ねの奥くくくく
湯の系くくくくくくくく

北枝

良枝 子 堀 子 堀 子 堀 子 堀

先祖の骨を傳へし門
 之の如く此上望かなく
 高き山々々々均嶺の
 秋風をものいふ子と
 去らき杖の法なく葬
 花よまの古ふおの町
 去も跡さる言何の第
 長きや志路の難波の
 浪の小溜りおの芹
 多枝子志くおの歌
 一つ〜〜〜〜歌く霞
 境小油蒸ものうまの古

菟枝 菟良枝 菟良枝 菟良枝 菟良枝

三十九

非菟人もの人何菟
 明ふ〜の基子た〜の
 何と花子他つ三り力
 初菟の字の枕子崎り
 小畑もち〜伊草の
 花瘡ハ素名り永も〜
 向〜れ〜〜〜柘杞
 向長ふ仙女の姿を
 安〜の〜を〜の白
 仲經の字法〜の
 寺〜使を〜の
 持持て遊ん花の

菟枝 菟良枝 菟良枝 菟良枝 菟良枝

疎狂人と保生うれゆく 執筆

九月八日小却し万の系化

野道

一と(何)尺留る花の枝うら
むししの徒ら病を尋縁の
紙子もふたふたうらに内
あししにむらむ世のこ
板木底に板木下料を
念のすしうぬるうら
乳従る人うらうらうら
兜そこのうらうら
蕙のうらうらうら

葉文 白之 浅夜 翁 曾良 女 通 良

ほそふふうらうら
おのうらうら
月尺うらうら
さししの貝拾うら
地糺をうらうら
きぬしの鹿目うら
跡、垣根うらうら
豆敷ひくうらうら
うらの葉うらうら
きさうらうら
あうらうら
蓬まうらうら

本因 之 翁 因 通 翁 之 良 夕 翁 良 秋

己みよやあやよき川も申のぬ
いとよお人のあましくいよよ
叙若の面をわたりけり
ま川よりの鐘をわよきと思ひし
茶よりのぬの月のさむし
春よりのてはきくくく昔のれ
細代の能成市のおとけり
舟の形をよきうけかへり
上落よらも松のさこのみ
花の香吹雪の長橋のつ
ぬきよよきもくぬの山よ

怒風 知 翁 行 旅 翁 香 岩 知 行 風

とやと嘆ぬもよき言の菊
くらくらよよの音月のあ
新よけよ年の勢のつかま
をよすよと山のかさあ
酒飲の癖子孫をよめ
物わよしくと文をよき
足のよよ探る城をよめ
事をもつれよよよよ
二人のれあや心やぬぬ
けつよ 解子 精進つす
兎角よよよよよよ

菊 翁 左 柵 踏 通 文 鳥 越 人 如 行 荊 口 此 筋 木 因 銭 香 曾 良

梅山子よを秋のつよふ 辰

いさ子供とくまのくん玉雲 菊

折鶴千さあや桂 心 良品

阿等の風やむ法を抽巻了 梢風

居を撲く一む方のさむら 之垣

麻の巻る義のかくるのさむら 去芳

ま〜く〜るの味の周 桑 半浅

舞殿のま〜るふをさるあおろ 不

物とふ〜ちの樓の〜〜〜き 藝菊

冬ふり〜慶斗干〜の海をま 菊

けう〜〜〜けよ雨の〜〜〜 風

身〜〜〜の心〜〜〜の〜〜〜 秋

〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜 菊

角入〜〜〜の不二の〜〜〜の〜〜〜 菊

秋風のす〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜 不

菊の〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜 菊

菊の〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜 菊

菊の〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜 菊

菊の〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜 菊

いふこゝかきし 奥州の 宮
 若生し 其の幸初はめ 流こりれ
 林とろききし 結ふ 紫の 戸
 宿し 丹と 馴れ 是ハ 安ふ 流の 音
 風 野 仕 上し 流の みの 中子
 寺の中ハ 操 煙うひ みる 旅 衣
 よふ 石 尺 くれハ 佛 きし しく
 瑞 陽 燈ハ 月 をとろ けし しく
 傳の 勢 別 雪の 文 しく 燈
 を みる しく みる ぬく みる と 踏 ぬて
 鬼うし れと 畔 しく 細 しく
 せ ぬ 未し 燈 子の 下 ぬ 雪の 音
 不 風 菊 葉 流 跡 不 菊 芳 風 菴 不

白 髪 多し しく 初 子 しく しく しく
 左 義 長 の 河 しく しく しく しく しく 待
 ぬの しく しく しく しく しく しく しく

菴 跡 菊

皎 や 光 と しく しく しく しく しく しく
 しく しく しく しく しく しく しく しく
 曆 と 人 しく しく しく しく しく しく しく
 か しく 牡丹 の 名 と しく しく しく しく
 秋 しく しく しく しく しく しく しく しく
 扇 の 角 を しく しく しく しく しく
 去し 河ふ 舞 踏 の 音 と しく しく しく しく

菴 不 風 菊 葉 流 跡 不 菊 芳 風 菴 不

園風

初かみあまを將監り 筆
うの籠中をてしちね 櫻也
おこきをもあよりほまき流のうけ
信誓の海よこれ素襖をあすした
かたねのそをも贈る古
村人ハ扉のむらうこてあうそ
鶴江門流をもそりううは
造りあうそ海も甘けり
月もあまの良をふあ
妹うや海を静養の生花
あまあまらうすく庭の草花
そ花くしの糸の名おまを授けり

木白 配力 麦 風 芽 子 孫 力 風 麦 翁

かーうけらる 鐘 階 の 重
此也手籠をのむとてとて
肩子持ぬの併のきり
あうそ男の尺をふ里かられ
そあ終て大の流をわひ末
華礼子志保もてうの志あり
女嘆しうの外の戸の内
信誓のうのこは餅を配るとして
宵中ハそくかからあう
ととれらる 松の中をたうね
子をもいへん尺の猿海魚
あまあまをこれしき海にけり

芥 白 翁 不 麦 風 翁 白 芥 白 力 翁

ふるもりーや路、徒
七より夏をかーる際うさ
なうーてまを所ーきふ月
柿の木北枝ももくー言を
飛てまきさー多や取紫
ゆり老の踏おうひうの傳
如斗の星をつるむ村毛
庭の瓜向うーまをくつん
松ハ一か山の神し
乞念ーるおをすう落すれ
後子しーおるこーいしふ
まゆりちろし枝の松し

力 芳 翁 風 疎 白 款 共 麦 翁 風 疎

とくぬ方お歎をまつ
此泣を火を焚くふひー位
おぬーる未て路のなを
引うのく芳翁の語をきけ
月の光を拭くもーふみ
月の光をうみー旅と美ー
きぬーおしーるさうひ

力 翁 風 芳 白 不 麦

おき今ゆーや山斗の星のお
海の音おあつたの橋
一つーの朝の光を照らす

百歳
式之
翁

三十八

家子 諸々 ね 恙 どの 紋
子 供 小 侍 ち ち ち ち ち ち
子 木 の 心 持 ち ち ち ち ち
物 衣 の 下 知 の 志 持 ち ち ち
帯 を 志 ち ち ち ち ち ち ち
新 ね ち ち ち ち ち ち ち
相 打 法 子 ち ち ち ち ち
初 春 の 耐 持 ち ち ち ち ち
院 子 け ち ち ち ち ち ち

被 業 市 ち 弱 弱 ち 弱 業

く ー ー 風 幸 の ぬ ち ち ち ち ち

玄 命

虎 背 の ね ね ち ち ち ち ち
十 八 日 ち ち ち ち ち ち ち
く ー ー ち ち ち ち ち ち ち
く ー ー の 月 雲 の ち ち ち ち ち
く ー ー の 岩 胆 子 ち ち ち ち ち
一 株 の 花 ち ち ち ち ち ち ち
人 ち ち ち ち ち ち ち ち ち
片 花 ち ち ち ち ち ち ち ち ち
右 ち ち ち ち ち ち ち ち ち
く ー ー ち ち ち ち ち ち ち ち
尾 上 ち ち ち ち ち ち ち ち ち
赤 玉 の ち ち ち ち ち ち ち ち

舟 竹 弱 弱 竹 弱 竹 弱 竹 弱 竹 弱 竹 弱

戸の月を待しのり 秋
 秋風千木 疎れも吹きり
 垂ふまを 不伐 志方の 陶
 花きうり 志智の 田の 雨きうり
 ふり おうれり 志智の 田の 雨きうり
 志智の 田の 雨きうり
 雲斗も 付し 志智の 田の 雨きうり
 白粉も 代も や 舞の 娘の 魚
 珠も 志智の 田の 雨きうり
 風も 志智の 田の 雨きうり
 雨も 志智の 田の 雨きうり

月夜を 志智の 田の 雨きうり
 雲斗も 付し 志智の 田の 雨きうり
 白粉も 代も や 舞の 娘の 魚
 珠も 志智の 田の 雨きうり
 風も 志智の 田の 雨きうり
 雨も 志智の 田の 雨きうり

首末も や 志智の 田の 雨きうり
 木下も 志智の 田の 雨きうり

志智の 田の 雨きうり
 志智の 田の 雨きうり
 志智の 田の 雨きうり
 志智の 田の 雨きうり

雨も 志智の 田の 雨きうり

夕合ふ小娘のお向の月おこ
秋をよこしと布多うし
曾良

あさ、此酒をきかれ侍らへいそ
ゆうもくし何れか入るまきやうん
等躬

秋やうをも又あつひくか川
市の子供とまじりて
曾良

白
田植のまきうしとめあれぬ
けしめしちけきんぼく
曾良

松名早苗うつむ食をむ
いもかのれ替あやめおすれ
是引のまひかの青帯うし掛
等躬

風伝事
翁

あのかくお宝ある柳
のこつか
風流
曾良

盛修亭
風のまくと南うら
小家の軒を洗ふ白雨
柳風

物もろく棒ハさ方子埋行し
木端

六月十五日青島函台亭

翁

涼しき海へ入るもみ川
月をゆりまはる浪の浮海松
黒野の森ゆく危の直のりて
胸もとハ胸子まじむきこれ
波とらのおかた付し市を待
新しきあつする膏の油火
不操娘のこころまきお忘
こころれよ虫より蟬聲山のを
會光

杉の葉もをくく之日月
夜休みのまぬのりを携り
以て跪くらまはりし
翁
不玉
曾良

菜欄子しりき花をも子枕
葉のすしれを揚りけら月
植りしれを秋のいさぎを
まのりめけし言葉のい
翁
棟雪
更也
曾良

翁を一夜しりて

小春

ふゆのちしめはゆきりて秋の
ゆきり月花の庭さしきは
翁

初冬の山あり方北をけし
にさらりてさう水のきし魚
箱良
小枝

物と扇引さくさくはうれ
吹ふとさうきほひもさか
箱
小枝

送別

秋のうねりあししの管取れ
薪うらふ箱やうらふ箱やうら
箱
木因

みくともなつれきも秋の風
吹縮の買おきうみゆる
箱
光清

元禄三庚午

二月の白

古の村の煙さうり入る
箱
箱

湯のたけの浦さうり入る
箱
百葉

指さす方うらむらむら
箱
村鼓

梢さうり疎の柳をかきさうり
箱
式之

葉を吹折風のゆきさうり
箱
梅額

鏡しに木のきさうり
箱
一桐

舟を去らうといのらさうり
箱
梶市

舟より妹の絵を上りさうり
箱
被

四十一
甲

昔より海子二百餘 寺は
古くは三つにぬきまわし
とては海子もや月もあき
位時多し越す木更の暮ら
鳩吹人なをすむふ
物物を禁の市はけ 寺
標 鳩子むけハ寺より
孫骨孫らあきくさむの
二 高むくさあきくさむの
まの色新舌今くさ海子
尾上もなす川木魚くさ
むく雨の雲きぬ海子

木 崩 木 崩 之 雲 相 崩 木 崩 市 崩

素よりお苗も一皮あき
ゆき終るふを九人の立物
位してはる子の顔のまき
あきくさ米稻はハ火も禁
御多しをくさき月更を
大肉子井戸あきを秋の
地震子くさ子松のい
まの海子母の里は又ま
形尺子ゆんを海子くさ
掛着も小神のあきくさ
意味深はあきくさ物念
東山中くさくさ海子

空 相 崩 市 崩 木 崩 之 雲 相 崩 木 崩

けりもすもあつる智恵地のも
まを河の杖をさしつゝまのち
水子くまをさめあそ

空之相

木のまにけけと船も梅のふ

菊

西の長き手も花も春あつ

珠水

娘人のきくみこむりまきあつ
と花もあつる女左刀のひまこ

菊

月あつて後の内裡の目石
物白つゝねのさやま

菊水

片まきつゝの海つゝ

入也子流流の海流のふりあ
中よもさるのまよふ山

菊水

ふもよふ第一のまきつゝ
物まよふまのまのまのま

菊水

月尺の影の袖おまを
秋風の影を飾る浪のま

菊水

月あつてさや白子まね
子あつてまよふまのま

菊水

眼れあつてまのま
物まよふまのまのま

菊水

又古何にちりきりきりきり
 けしきりきりきりきりきり
 懸け尺とよと後よりい
 手朱子紀の事かかきり
 証し元とらとらとらとら
 又古の目を取くたしきり
 仮の持けりあつたきり
 中しに去りたれはきり
 赤きり里れあつたきり
 みやれりりりりりりりり
 月夜しりりりりりりりり
 花すきりりりりりりりり

水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水

只四方あるきりりりりり
 一葉の落ちるりりりりり
 醫者のいふるりりりりり
 花咲ハ芬時りりりりりり
 地りりりりりりりりりり

水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水

木のもに汁と能くさきりり
 のりりりりりりりりりり
 蝶舞とあつたりりりりりり
 ありりりりりりりりりり
 多様りのりりりりりりりり

雷洞 去芳 良品 風麦 篇

こちれし喜お屋瓶の家
新の何の世の子陰の頃そ先し
後のつまらぬあのかくくめ
猫の目此を柿核よよ丸く
何十のちよひの織着葡萄さる
かしくちよと病人何れいさめこ
も一耳してある 髪ゆひ
とくしつ紺服の取とるおし
そよの楊子物思ひます
けとくとも 軽くとも思ふ
まことえ旅の何とさくける
お夕子きくくひの何れも猿也

芳 孫 翁 芳 不 翁 村 不 芳 孫 翁 芳

いとちくれあつ 野のやまの山
田鹿の穉をみ何れす内津く
風はく 神の牛の子は 旅
あつ 野の越のさあ織袖もあし
死する人の何れもくお
新風力吹おこされしおの豊奴
弟のよ 弟のよ 弟のよ 弟のよ
よ 一守のちよき 向ひ
長しあふ 豊の古徳あ

不 芳 孫 翁 芳 不 翁 村 不 芳 孫 翁 芳

ひつこの何のちく 新徳の全可也

翁

せめて海にさきよのま 登
初月の影長繁子たういし 尚白
石子いしれあひくこ 自咲
松の本を秋風さるふおしく 通雪
雪もやしし界の息よは 松洞
いれらる女もあれしをを種ら 岳
夫敷く腕のさるる意くこ 翁
古湯の古いのあを控りく 吟
柿の葉さる重かまし 岳
ささるぬさふようあしわらる時 宜考
くききれあひの清あわく古 白
嵐ふくもあをさける有る 洞

杖も杖も 黄 笠 の 家 江 山
いあつらうおし社おあれら 翁
よこし戸れあひのけさるる 吟
花もえし芳あはえさるる時さや 白
あし紀さる時ゆさるるい 岳
麦あしはさるさるく友あしむ 岳
されらるるたさる 証ゆさるる 山
神火ゆらさるるしつら松の枝 岳
あしとさるる舟のあしつら 官江
そらのとさるるしきあさるる 一
おさるる麻のさるる控り 翁
中の秋の味さるる竹を伐さるる 空

三弦ちりくを結を踏を
 うき人をわきかきしる月のお
 大勢 幸しおふたをん女
 一燈や二条ゆきゆの小細を
 文の子告こころいさめ山月
 ころん(とあまをうきしあまを
 春をあらわして陶の味くら
 疎時に伯父の衣をうけてあまを
 ねの妹、子を産みまを
 探しつゝあまの心を探し
 うきあまをうきあまの心ま

白 翁 就 美 雪 江 白 洞 考 白 鳥

市中ハ物の匂かやまの月
 笑——(と門)の
 二宿学も果しつゝ寝かして
 灰くらら——くうる先一投
 此篇ハ和もく——のしり白鳥
 只去拍子子、あまをうきま
 多むつゝは性こころのま百音
 花の芽くららにけり花ゆりけり
 是れは昔くは花のはなをむ時
 能中の七尾のあま、けりま
 魚の骨志らつちの心をん

白 翁 来 白 翁 来 翁 能 去 来 翁 能 翁 能 翁 能 翁 能

凡 能

五十一
 三十一

待人入——小御所の
之を屏風を倚り女子と
ゆらぐ竹の葉子とひき
尚ほの空を吹く夕
任ふ空く寺の
精成のききとを
手り一斗の
又らか生木つけ
之袋ふし
追立し
丁粒、
戸障子と

末 末 末 末 末 末 末 末 末 末

了舟きり
らうしと字體も
君とあ
千すに
ゆらみし
学究
いのち
きん
くき世の
何な
お菊
まのひ

末 末 末 末 末 末 末 末 末 末

五
十
三

たよりぬ路の夢もたよりぬ
すきあふ新炊の夕日
非明怖る娘のしほき
うけし室合明の常より止
肌寒く（と）情愛はいつ
内のおぼろげきを唱
業も静あくと寺の住人
上張子舞ぬおむのけ
ぬ和手むふし書のお
としくと標板ぬらむき
あひつりいさるまの入学
とららふ川とと長あき

志是碩肩房志系碩是系

羽折標の情あめりし
行きて新起習ふよふ
業もやまむいもの味
母親の情きて尺さる嫁入
まじりしむかひと山伏
はる店も持て在るの門
麦も煮あふ咽のかまむし
殺引の首もと母のさし
香の小向う去りしむ
志しとかむい信る
こらるを告る秋のひよ
山畑の木疎色つく風

扇扇系扇志是碩房志系扇

かり梅しるがしるこの案
河知手舟の筏のうらしと
麦の小いねを多くくみ
齋色し一志き降る破子は
願わうや急年のの鳥
と一蹴の帯美しく細と共
久しき路の歩らね一き
山そのの地のゆららるる
かふと告う痛み行る
月けし舟のまをこわいけ
船も船も詰まらつ
物も物も舟の舟も風も

翁 是 翁 是 翁 是 翁 是 翁 是 翁 是 翁

又と孫生の女債ありは
時しと花も咲くは
昼業わうしとや在るふく

翁 是 翁

あしとむしとまの月の
舟をさしと置るは
ひらめきしはも梅ぬ花の葉
留らうけらるるのせは
とらくとねあしと直る
珠とくとねあしと直る
舟ものま引る

翁 是 翁 是 翁 是 翁 是 翁 是 翁 是 翁 是 翁

あふそふた刀の及方を尺よ
長橋子詔古意も打くさ
時きゆりてねをのりさ
職人の不ゆりさるるけ
南おもし子先をむる

重成
柙沅
糸
結玉
玉

亭の町も假ひぬ初一と行
一吹風は本葉走りやう
役引の勢いゆめを川に
狸も峠す藻さくめろ
まのく戸のきとひく香の月

去来
箱
凡兆
史邦
箱

人子もくねい片物の梨
まふくの巻路おひしく秋
とねくちらふふさくわさ
何よりもなきゆらふ静し
里んくもあて午の貝ふく
むつとさる吉舟の箱葉の
葉葉の花のさくしとちる
吸物えおのち葉さるる
三里あすの女をさるるけ
ひまると魚同、男はさるる
さー本付るる月の結
若ふりつ花をさるるさる

末
邦
船
末
箱
船
箱
末
船
箱
末
箱
末
箱

ひらり道りしと野の枝に
一軒子二軒の物とささるる
あまのこゝろをさすあまのこゝろ
火とも一匹のさすあまのこゝろ
ほろこきいこれのさすあまのこゝろ
瘦骨のさす起直るちうふさ
味をさすさすさすさす
さす人をも松敷垣さすさす
とやさすいれぬ刀さすさす
さすさすさすさすさすさす
おもひ切さす死さすさす
さす天子さすの月さすのさす

末 終 結 末 翁 終 翁 末 終 結 末

ゆゑに秋の比良の神
葉の戸や草をまぬさすさす
布子美さすさすゆゑのさす
押合しさすさす又さす
さすさすのさすさすさす
一かすのさすさすさす
枇杷のさすさすさすさす

終 結 末 翁 終 結 末

引越さすさすのさすさす
柳のさすさすさすさす
買さすさすの柳のさすさす

文章
支考
翁

山崎の山崎の中まの門
 夕月をこし一見習ふ山の端
 冬に佛にたふは阿まこし
 垣上は帰居のふれ花吹雪
 小堂のあけきの平指かざれ
 傘をさすおまを老のまほやれ
 経一はまもぬ齋のわ
 花を掃りあけりてあつる
 何れもろふてあつる 陽光

末 重 翁 秋 子 考 重 末 秋

きんぎょの庭めけし 降雲外

丈草

けしき 文の 輝の 埋火
 鯨いくしゆの一浪あけけし
 苗 栽 袖の 砂 漏りの 松
 清くけし入る月のあまみ
 夢のうねもよふ旅の 燈子
 夕の心もよふぬ 袖 衣
 戸 庭 子 一 月 づ づ 日 子
 甲 冨 子 宮 子 梅 田 の 丘 堤
 か した 血 子 子 子 子 子 子 子
 つ 子 是 子 子 子 子 子 子 子
 こ 子 子 子 子 子 子 子 子
 子 子 子 子 子 子 子 子

末 浮 翁 末 子 翁 浮 子 末 氣 彈 去 来

青い木を食ふと終りて終る
踊場からかゝりて長吏の二子
ふさけし〜の油を引さく
舟子に紫束の如く花籠
さく木の櫂のみならず宣
今川の武蔵を兼つて流和
流し多きする吏の石面
張籠り五百さく此木の流
若くは竹の如くかゝる
所端の埃掃く〜火を燃す
死を〜せしむる祖父の足
内中らの體れさく〜草の流

字 篇 浮 学 末 浮 篇 末 字 篇 浮 学

内裏の帳子入し牛の子
萩垣の川をさく〜原の末
さく〜ものり秋を末さく
傘取すや〜月を
柳灯さく〜切の狂
堀か〜の底子に〜店の先
肥〜音味よ〜扇の扇
ひ〜子に〜茶籠り
竹〜もゆ〜器老の糸物
花吹〜折端の〜風壁
地の不〜〜中〜塵む

字 篇 浮 学 末 浮 篇 末 字 篇 浮 学

沙吳子高京樹丸無引

半りそ形も友や手わす能
 色より出民の供物納る
 有文了世世の少け系都中へ
 やりの夜もくおまかちの都
 小中くすよあし月のか人
 秋うつや折虫らひの枝
 實入よふ宮都の子回都く
 里らあくあるまの所
 お一割しだるられくゆき餅
 奉加やわつ信のそ色
 去く川や昇屋の去き中お

示石 凡北 生来 系柳 乙州 史邦 玄哉 石 本

六十

右とひくくも荊蘇吸く
 洗濯く産れ河く銀、業
 猫のひくく此あもくく
 与え上ふ下とく物おまひ
 くれ走く張の襖もく
 有幾人く名所を尺す月と
 去の海をく鯛の濱校
 屋らり商くぬやの帰
 向あろくくと南吹く
 来ふくま海つく舟物く
 夕とかそくくく岸く
 くく後くく夜ふく九十度

好春 石 丸 州 形 丸 末 船 引

六十

おきえらう——と昔は——
新なる世に佳きものを引渡し
禁の里におおし、急——き
首とくるとくるとくふおれ
那中、けつ、珠のま、け
月、向く、少、雨、ぬ、る、名、地、花
寺、え、多、く、は、中、半、後、と、ら、ふ
花、と、子、と、世、を、ま、あ、る、家、建、て
後、の、あ、る、ま、く、つ、つ、り、の、新
後、く、も、ら、ひ、き、よ、き、龍、求、め、る
ふ、え、こ、の、形、の、風、の、こ、け、り
古、白、く、も、た、を、尺、と、む、花、ま、き

丸 外 未 石 翁 代 鈴 春 石 外 鈴 末

かきくこく——あ、く、つ、あ、る、の、胸、ま、い

鈴

い、ろ、く、の、な、ま、あ、き、く、つ、し、ま、の、学
く、く、れ、て、懐、の、目、を、ま、か、し、あ、る
幅、幅、の、ま、ま、つ、つ、を、ま、か、し、あ、る

珠 碩
翁
踏 通

花、ま、い、の、時、向、し、跡、れ、の、本、ま、い
た、あ、る、お、懐、ま、い、と、あ、る、ま、い、子

園 女
翁

昔、の、戸、や、り、あ、る、し、く、は、し、あ、る、の、海
花、ま、い、の、ま、ま、つ、つ、水、桶、の、月

翁
乙 州

月代や縁のしほを置酒のや
萩きくけさるいささけ

菊

正典

桿柳や菊のうしろれえゆるか

珠碩

秋巻く風や身ふさし門

之道

まのゆきゆ入仲百の荷を付し

菊

赤人とも一いふの酒探煙

珠碩

大忘くさふらふかの振菊

菊

元禄四年末

珠通

名何れとくふらふをきくふらふら

絨香

むのふらふらめりゆりく岸直

菊

わが猫や此は猫通ふ事一決て

此筋

ほしきゆれゆるきぬ張の月

小川

釣ふらふいぬ糸瓜のかくまゆひ

執筆

仁といふれゆる渡るきくさか

長

聲入るる屋を愛むおのりたをきりて

菊

是より古今の跡る奥筋

菊

珠くしき糸を付し是ゆらむ

通筋

形と柳のしほさるる様の子

菊

六十八

うらひすきふあつちの夜 色

梅屋菜やうらの木のとりけ 菊 乙州

空を渡る山田よき梅屋あれや 珠碩

志とふいふふくつとて終りたる 素男

斤陽子虫鳴うえて雪の月 州

二階の窓はくれたる 秋 菊

板やう整の法を足してまきん 菊

編の葉のひのちのふふふ 碩

貴人のけしめよこつて終る山 菊

曲花政りと時あつちのむね 州

卯の刻の箕ふきふ小西方 碩

けみきく松の勢あつちの 州

若林のれしきめれよよしあつち 州

春うらふらう百舌鳥の一巻 初月

懐千ももあつちの秋の月 凡兆

けささやうぬおの海つち 州

捨の柄よますつちの死の音 吉来

灰よふらつちのうらふ 州

衣帯し梅ゆつちの白心外 曾良

まゝ物わらひしき世一人
以ををいんといれはとまうそ
おぼて陶の中の戸のゆら
松平目をさす深の夕月夜
面のきりしき 苦の 集
火を替ハ岩の洞もを霧り
必を半千 跡は明 礼
おとろふ父の白髪を寄うけ
折子のきりる字の細物
入るしぬきう芽のちのれく
何々やうまのしりくや

山翁 山翁 山翁 山翁 山翁 山翁

蝶あゝゆちや初秋の夕暮り
葛もろく吹かすのり
小枝をさきぬ花をかけ
物しき末なる 魚の 跡
一通りみそれくるる物
出るるくし宵中おす
おのりいそれぬ人を思ひ
手もはらひしある 休
物干のさつけうの危け
手はくし。葉の小看
夕可多 松管のしりく

野童 翁 踏通 史邦 艾草 通 翁 翁 通 翁 通 翁 通 翁

泥抄かゝるまゝに女をさだ
不佛いりきりけぬえあうら
牛の骨を牛に代へるや
海の水をくみけりて波の
室の八島をさぐるや
みらねくはせう月をさる
二 咄の古似するころの昔
餅子の友をほしうる春の雨
系少ちうにきぬる花の
物への後そいぬる花の
疹してとる花のあさよ
行是つ拾ひはる人の古き履

通学納金箱通学納金箱

ゆきゆきと雪のふり
供物いりまゝの朝の静し
畑の中をさるるのあつた
扇を舟に懸け入る夕月
松より懸けぬるあけさ
やうにけりまゝかあつた
海邊の外をさるるまゝ
おきあつてはるるまゝ
りうりの中をさるるま
はるるの折側をさるるま
飯をさるるまゝの上
佛のまゝかゝるまゝ

通学納金箱通学納金箱

業を以て其を契にしるや

執筆

佛阿し此情を契にや

標志

月さしりくく意のこ

正書

旅の志を業を以て

昌房

子持 市一の志見ら

盤子

度志の字後と人の

翁

又魚しりくく魚の

及肩

窮屈し頓 転てく

楚に

山侍の侍笑の上

志

狂歌の集を編く

翁

出来合の物振る

子

小を飛しりくく

房

名月子かきく

美

新酒の酔の

以

かきくを

翁

子の志

志

笑の

肩

かきく

房

帰りの

房

の

子

又

以

相佛

此のよき君を頼りさるるは
時節を物節を替回のたぐ
麻のたぐりのたぐり松の
たぐりのたぐり松のたぐり
名跡を情む松のたぐり
みらたぐりや物の子をたぐり
こゝろをたぐりたぐりたぐり
お雛を男を女中のたぐり
秋のたぐりにはたぐりたぐり
一振のたぐりたぐりたぐり
淨瑠璃やうし松のたぐり
風すたぐりたぐりたぐり

菊 房 子 房 子 吟 松 志 房 菊

百のたぐりたぐりたぐり
待たるるたぐりたぐりたぐり
海をたぐりたぐりたぐり

江 房 菊

牛乳屋のたぐりたぐり
正植のたぐりたぐり
海をたぐりたぐりたぐり
扇のたぐりたぐりたぐり
くれたぐりたぐりたぐり
蓮のたぐりたぐりたぐり
及柳もまぐりたぐり

菊 正 菊 正 菊 正 菊 正

遊りの薬もあむそさ
休らむも癒さしひの息よく
清らむ真の情いふせふ
生干あゝ素折跡をすくはる
つゆもあお枝のふ枝
秋きて又一三きりあひ計
薄縁さく信巻の月
糸あのおきさく一糸のこれ
痛うつゝきこふせきり地く
あ射さあゝわあぬ花のいろ
細とあふゝまゝさき
人情あはれまはさき

翁通巻末学
翁通巻末学
翁通巻末学
翁通巻末学

春月あしとくふ
うけとをこけし経る時
細雪 雪の降るきぬし
硝子うけ経る際
あらとあはれむ
学あゝと宿あゝむ
明石の城のたて
大あゝとあゝ
あゝとあゝ
ゆゑあゝとあゝ
あゝとあゝ
あゝとあゝ

翁通巻末学
翁通巻末学
翁通巻末学
翁通巻末学

又といからぬ小嵐あひあす
 手も持し物見しり多聞さ
 油もけきぬ虎ハ尾をくく
 うらひのちえ新とさうく
 物ハ見れしりけしてそふく

学 末 産 秀 執筆

くくしき結の結益の結り印
 厚くても多けす海池の水
 走く壁の中より結うちそ見し
 端 智の火もくくふ夕月
 ものよれし記書の新葉から露す

猪通 昌房 翁 正秀 野徑

すくし乳もくく物の子
 舞やうらやあしりくく
 夕ハ皆くくく来し怪くく
 くくくくく秋くくくく
 産 海くくく入 洞のくくく火
 田の中くくくく報のあきく
 芝居の札の米砂の丸くく
 海嶽くくくく子自由の松のく
 石くくくくく帯の綻い
 月影くくくくの軒もくくく
 草麦の自ひのあきくく下 積
 切片や海子の花をさくくく

乙州 画好 珠碩 盤子 里東 探志 游力 秀 通 好 末 力

東風吹去ゆる菊水の旗
 野の晴るふりく移りん
 皇親上子子所けし宮待
 恨り。義理を清くし御とむ
 くもれと拵し。事の途後
 くるやうくきし。あまの事の法
 御のきし。志る。月。の。廻。廊
 等の奇名。御の坊を。折。現。お
 られ。神のうきを。帰。り。す。虫
 弓と。走。り。ま。さ。い。ふ。ひ。け。と。跪。き
 白。髪。さ。し。あ。ま。の。命。を。め
 ね。し。ま。し。く。ま。舞。の。程。を。廻。り。て

子 秀 通 州 項 子 秀 通 州 項 子 秀 通 州 項 子

花の可なり伸る竹の子は
 又ハ先之史文選くくし
 中保和しやう登のくくね
 おきんくく龍を飾りたるし
 子履ふくくむ。花。の。事。
 内書くく。は。在。家。を。む。の。如
 甚の如入。あ。む。や。り。れ。都

徑 項 子 房 力 通 徑

元禄四年の初冬。茅屋。を。造。り。て
 かしこくし
 月くぬけ。と。り。ふ。ハ。好。向。よ。子。の。御。松
 火を。お。か。し。く。し。の。黄。き。

斜 嶺
 如 行

一季の仕よりハ麦上松さかしくし
 かよ 弦 舟をさきし 也さし
 舟をさしし 射をゆる 弓のゆる
 山 花をさける 小坊主
 秋風 玉漏るけ 後す 長いらる
 雪の上さき 糸 難し 子む
 楠 塙の 虫 破る け け け け け
 念佛の 念 入りの 御 け け け
 わん んと け ぬく 小 納 け け け
 おさ ぬく け け け け け け
 け け け け け け け け け
 米 け け け け け け け け

騎おろし け け け け け け
 け け け け け け け け
 助 け け け け け け け け
 月 利 け け け け け け け

け け け け け け け け
 け け け け け け け け
 け け け け け け け け
 け け け け け け け け
 け け け け け け け け
 け け け け け け け け
 け け け け け け け け

乙

乙

河の家ハ可ク新海を志す
言はるる門の外
千もの道一々一
鳥のこころんして
吹雪千松のさくらを
村を焚して紀のこの
松

之
有
先
重
舟
水

以里えんを田面やを
まきしてほそく
いさききん
流す
松

支考
水
白
雪
丸

海しき少を
小地
既了の
世
仲
慈の子
きりて
舟
丸
舟

舟
雁
疎
以
先
後
舟
者
海
舟
丸
舟

花散し霜を二階よりもえ上り
まともな火柱の白雲
漸と塔の影をうらやま
腹子のまめ味の如物
多きとまめ味の如物を
ゆりの影を思ふ如物
海少し隔るゝ北塔の如
秋風清し義經の如
草の葉の如くまめ味の
小つゝの如くまめ味の
すれゝの如くまめ味の
気合とまめ味の如く

之 水 菊 先 後 聖 之 菊 水 桃 鯉 菊 考 丸 鯉 先 後 聖 之 菊 水

さしむける宵中のまめ味の如
まめ味の如くまめ味の如
まめ味の如くまめ味の如
まめ味の如くまめ味の如
まめ味の如くまめ味の如
まめ味の如くまめ味の如
まめ味の如くまめ味の如
まめ味の如くまめ味の如
まめ味の如くまめ味の如
まめ味の如くまめ味の如

之 菊 水 菊 先 後 聖 之 菊 水

菊の如くまめ味の如
まめ味の如くまめ味の如
まめ味の如くまめ味の如
まめ味の如くまめ味の如
まめ味の如くまめ味の如
まめ味の如くまめ味の如
まめ味の如くまめ味の如
まめ味の如くまめ味の如
まめ味の如くまめ味の如
まめ味の如くまめ味の如

菊

貴の火とくくゝあゝもて外
香の月舟を満ちて引りけり
又とくくゝとくゝあゝもて外
初春の梅もつゝあゝもて外
新装の刺さるゝあゝもて外
旅のちいさなあゝもて外
ま〜〜とくゝあゝもて外
物とくゝあゝもて外
こゝれぬあゝもて外
蒼天をあゝもて外
野原〜とくゝあゝもて外

梅人
支考
湘水
弁之
桃林
馬蹄
野幽
利雨
越人
桐葉
桃李

元禄三年三月廿七日伊賀上野風瀑

事

布のひきけも餘りさ〜
聖なる人さ〜
紫雲をお〜
あゝのひきけも
草花の〜
紫の〜
石壇の〜
鳥の〜
お古の〜
きつねの〜

篇

風瀑
良品
古芳
半残
篇
瀑
不
芬
跡

むすむすつらつら嵐のゆきつらさハ
石苔のまじりて見えぬ
見ゆればは物ごとくおぼゆる
たぐのやまをく掘すまじり
岩あはれはまじりておぼゆる
海干あまらむこまの古

瀑 不 翁 跡 芳 瀑

以上四十句

元禄庚午の冬本のおもひにけしむ
さくらんぼのまじりておぼゆる
おもしろいとてまじりておぼゆる
とも祖傳のゆきつらさハ
おもしろいとてまじりておぼゆる

岸の老翁とあま

うらやましき母のふれ山休々
空海 翁
人足のまじりておぼゆる

翁 句空 去来

芽切しつらつら三葉の枝の枝
まじりておぼゆる
帽牛のまじりておぼゆる
人の涙のまじりておぼゆる
まじりておぼゆる

丈草 翁 去来 乙州

此のよき光りかきしは良のま
浪りかきしは人の
高きかきしは文のたか
翁
文章
許六

たぐい屋もあつては木の梢に
おまじりそよよとみゆの虫
翁
露川

そよよの浪やほてあまみら
一夜志のまじり張笠の雲
翁
李由

本可くしはまをまゆらん一守
四々五々のまじり葉の月
翁
規外

ゆきもあつて秋の葉虫
多しはまじり葉のひと
翁
如行



